

山と博物館

第49巻 第3号 2004年3月25日

市立大町山岳博物館



写真：カナダヅル 2004年2月14日 豊科町犀川光ダム湖(白鳥湖)

親子探鳥会「ようこそ水鳥」

文・写真 清水博文

平成十六年一月二十五日に大町市木崎湖周辺で、二月十四日に豊科町犀川光ダム湖で探鳥会を開催いたしました。これは財団法人自治総合研究センター平成十五年度コミュニティ助成事業(青少年健全育成助成事業)です。両日併せてのべ子供二八名・大人二三名の計五一名の参加がありました。

木崎湖では水鳥九種を含む二六種、犀川光ダム湖では水鳥一五種を含む一八種の野鳥を観察しました。木崎湖と犀川とは観察できる野鳥の種類が異なります。光ダム湖は人によって餌付けをされている場所であり、ここで多く見ることの出来るオナガガモ等は木崎湖ではほとんど観察することができません。逆に木崎湖に多く見られるオオバンやヨシガモ等の種は、光ダム湖では個体数が少ない傾向がみられます。また、光ダム湖付近に分布しているカワウは木崎湖では全く見ることが出来ません。このように水鳥の分布の違いや、種により人間との関係を含め、異なった環境を好むことを二回の観察会を通して学ぶことができました。光ダム湖では非常に近距離でコハクチョウ等多くの水鳥を観察することができ、特に年少の子供たちが興味を持ち楽しめたようでした。

また、そろそろ水鳥の北への渡り(北帰行)が始まることから、同種ごとの集団化が始まっているところや、一見ばらばらに見えても、ほとんどの個体がつがいで行動しているところも観察できました。

この観察会は野鳥観察のほか、広く自然について学び、興味を持ってもらうことを目的としています。雪の中に飛び込んでみたり、雪の上に残された動物の足跡を探したり、周囲の林で冬の植物の過ごし方、冬芽、昆虫の越冬などについての話を聞き、実際に触ってみたりすることを通して、楽しみながら環境について考えることができました。

大町登山案内者組合のはじまり(前)

関 悟 志

はじめに

平成十四年十月五日から十二月十五日に大町山岳博物館で開催した企画展「対山館と百瀬慎太郎」において、「大町登山案内者組合」というひとつの区画を設け、結成当時から初期の山案内人たちの写真や山道具などの資料を展示したほか、彼らにまつわる逸話を紹介した。

過去、当館で山案内人に焦点をあてて行った企画展示は、昭和四十九年(一九七四)度に開催した大町市文化祭時の企画展「歴史に見る大町登山口―針ノ木峠―」がある。このときの展示概略と一部資料に関しては、荒井今朝一氏が「大町口登山案内人抄録」と題して本誌上「註」で紹介している。大町登山案内者組合の概略や初期の山案内人の姿などについてはすでにここで述べられているが、ここでは今回の展示を通じて調べた文献や大町山岳博物館所蔵ならびに個人所蔵の資料や関係者からの聞き取りをもとにして、次の点に関して述べたい。1. 大正・昭和初期の登山事情、2. 山案内人と大町登山案内者組合、3. 山案内人の仕事、4. 山案内人の横顔。

まず、大町登山案内者組合の結成から現在に至るまでの流れを確認したい。

大町登山案内者組合は大正六年(一九一七)六月、百瀬慎太郎が主唱して大町に設立された。設立時の組合員は二名。

昭和十六年(一九四一)に太平洋戦争が勃発すると、このころから山に登山者の姿を見つづけるのも難しくなり、組合は一時休業状態となる。昭和十八年六月には対山館が廃業。昭和二十年八月に終戦を迎えた後、しばらくすると山へ登山者が戻

りだして案内人も再び活躍の場を得るが、昭和二十四年三月に慎太郎が亡くなり、組合は岐路に立つ。結果、同年六月に組合員二名で新たな組合長のもとに組合存続を決定する。

昭和三十年代に入ると登山を取り巻く諸環境も整備・充実し、個人山行を中心に「無案内無人夫登山」が主流になっていく。その後、何度か組合長が代わりながら活動は続いた。そして、平成六年(一九九四)に規約を改正し、組合員二名によって再出発が切られ、その際に会の名称は大町登山案内者組合に定められた。平成九年には八〇周年記念式典が開催され、現在にいたっている。註②

1. 大正・昭和初期の登山事情

大町登山案内者組合が結成された当時の登山事情はどうであったのだろうか。

明治時代にはじまりを見せた日本の近代的な登山は、大正時代に入るとさらにその裾野を広げる。明治四十年(一九〇七)、白馬岳頂上の石室に山小屋が併設されてから、大正初期までに北アルプスでは次々と山小屋が開設された。また、大正二年(一九一三)には陸地測量部によって、北アルプス部分の五万分の一地形図が発行される。

大正初めには、北アルプスの各方面への登山口を持つ大町にも東京などからの登山者が増加した。当時、東京方面から大町への交通手段は、列車を乗り継いで篠ノ井線明科駅まで来て、明科から大町までおよそ二〇kmの道程は、ガタ馬車とか円太郎馬車と呼ばれた乗合馬車によるものであった。しかし、大正五年に松本・大町間の軽便鉄道とし

て信濃鉄道が開通したほか、自動車の普及により、乗合馬車は昭和初めに明科・大町間から姿を消すこととなる。註③

(一) 日本の近代登山の黎明

では、前述のような時代にいたる以前、明治期の登山事情は果たしてどうであったのだろうか。その流れを見てみたい。

明治維新前後、国内では新しい目的や志向の登山が行われはじめる。それまでは狩猟・漁労・採集、信仰、軍事的な目的での登山が主であったが、いわゆるお雇い外国人らによる調査や趣味の登山、西洋流の知識を体得した日本の自然科学者による学術登山、政府による測量登山、教養人による探検登山など、様々な人々による多様な目的の日本における近代的な登山が富士山や北アルプスなどで繰り広げられるようになる。

やがて登山という行為そのものや山岳美の魅力が書物などで広く一般に伝えられると、さらに登山者が増加し、登山環境の整備・充実が時代の要請となっていく。註④

ここで明治末ころにおける登山の一例を伝える逸話を紹介したい。

明治四十三年(一九一〇)夏、田部重治註⑤は有峰からザラ峠、針ノ木峠を越えて大町へ抜けようという山旅を計画する。このとき用意した物は、テント代わりの油紙、十分な食糧と寝具、それとなんと一本の日本刀であった。これは護身用を持っていくようにと父がよこしたもので、親を心配させないためにと田部は山行中に携えることにする。道中、人目につく里では刀を着奥座に包み、山中では腰にぶら下げて歩いたという。この山旅の出發前、田部が参考のために目にした当時の陸地測量部二〇万分の一地形図の右下には「本図は精確なる材料によつて調整せしものにあらず、故に二〇万帝國図成の上は、廃止すべきものなり」との注意書きが小文字で書かれ、架空の山名も数

多く記載されており、信州・飛騨・越中の山岳地域は当時未知の境であったと述べている。註⑥

こうした当時の状況を考えると、田部の父親が帯刀をすすめたのも、あながち大げさとは言えないのではないだろうか。

また、次の逸話からも当時の様子をうかがい知ることができると思う。

明治三十八年夏、武田久吉註⑦は山仲間らとともに、八ヶ岳経由で明科から大町を通って白馬岳登山を行った。その道中、予期せぬ事態が起こる。出發前に東京から送ってある荷物を明科駅で受け取るうとした際、郵送したはずの引換証が届かなかつたために荷物をすぐに手にできなかつたのだ。詳細な事情説明をした上、証人を立て、拇印を押した仮受取証を渡してようやく落着する。当初、引換証がないと荷物は渡せないという明科駅の駅員の対応に久吉は「出發前に東京の信濃町駅から荷物を発送した時、明科という駅のあることは、駅員さえ知らなかつたほどの所に、知己がありよう等もない」ともらしている。註⑧

明科駅の駅員は所定の手続きに準じて職務を果たそうとしただけかと思うが、東京の駅員は明科駅という名を知らなかつたというのである。東京から大町方面へ赴く旅客者は、当時それほど多くはなかつたということであろうか。はたまた、その駅員がたまたま知らなかつただけなのか。この後、久吉らは馬車にて大町へ入り、徒歩で白馬方面へ向っている。

(二) 乗合馬車

この章の冒頭でふれた明科・大町間の乗合馬車について詳しく説明したい。

大北地方に荷馬車を含めた馬車が姿を見せるのは明治十八年(一八八五)のことである。それ以前は明科の乗り物を使った人や荷物の運輸は、人力車と牛馬による荷車が主であった。大町に乗合馬車が登場したのは明治十年代であり、明治十年代末には

大町に四〜八台ほどの荷車があったという。[註8]

当時の乗合馬車は明科から大町間五里(約二〇km)の交通機関として、大町方面へ向かう旅行・登山者などに利用されたようである。御者が馬を駆使し、鉄輪がガタガタと音を立てる様子から、ガタ馬車やトテ馬車などと呼ばれた。大正四年(一九一五)、当時「大阪朝日新聞」に籍を置いていたジャーナリスト・思想家の長谷川如是閑(本名萬次郎)は明科から乗合馬車で大町へやってきて市街地を通り対山館へ宿泊した。如是閑はそのときの様子をこう記す。「ガタ馬車が吹いて又吸うやふな時代を超越したラッパの音と車輪のけた、ましい騒音を響かせて、町の沈んだ空気に一時恐ろしい波動を立てる。」[註9]

大町・明科間を結んだ大町における初期の乗合馬車は、一頭立てで乗車人数は十人ほど。その間は二時間半を要し、一日に二〜三往復したという。料金は明治二十五年ころで、片道三錢ほどで、途中、社宮本と池田の二ヶ所で休憩し、宮本では茶代として一人一〇錢を取ったという。大町で最初に乗合馬車による運輸をはじめたのが、八日町の平林鮎市であったという。神楽町・八日町・東町・五日町の接する交差点の北東に車庫と事務所があり、この馬車の発着所は立場と呼ばれていた。[註8]

一方、明治十年代末の大町には乗合馬車とともに乗合自動車もあり、その台数は一〜二台で、大町・明科間は二時間を要したという。[註10]

北安曇郡内の車両数推移から見ると馬車は明治末から大正初期までに絶頂を迎え、以後は減少している(大正元年に二三百。大町市内のみを見ても、昭和五年(一九三〇)には自動車が一八両に達し、一方、乗合馬車や荷馬車はこの時代には姿を消した。これは大正五年の信濃鉄道松本・大町間開通の影響が大きかったと考えられる。[註8]

2. 山案内人と大町登山案内者組合

山案内人とは登山者が望む登山を安全かつ確実に先導して収入を得る者で、登山案内者ともいう。初期の案内人は登山者の荷物を一部背負う歩荷も兼ねた。その信州側ではじまりは明治中期のころで、登山者に請われ、山の地理などに詳しい地元の猟師など山人が山の道案内と歩荷をしたことにある。一方、富士山や立山などでの信仰登山においては古くから参拝のために登る者を先導する者があり、登拝者の荷物を運び上げる強力な歩荷などと呼ばれる同行者たちがいた。彼らも近代登山の隆盛とともに山案内人へと姿を変えていった。大正時代に入り、登山道・山小屋・地図など登山環境も急速に整備されてきたが、まだまだ危険をとまなう野営が主だったので、実際の登山には山案内人の存在が不可欠であった。北アルプス各方面への主要な登山口だった大町では、当時、夏期中心に山案内人の需要が鉄道の開通などによる登山者の急増によって急速に高まり、質の高い山案内人の安定した供給が求められた。こうした要請を敏感にとらえた百瀬慎太郎が主唱して大正六年(一九一七)に大町登山案内者組合が設立され、山案内人の資質向上などを目指した。設立時の組合員は二二名であった。[註3]

(1) 山人の跋渉

前述の山人とは、狩猟・漁労・採集のために山へ入り、山の幸を得ていた者をここではさしている。その多くは山里に住む猟師や樵などである。彼らは動植物や鉱物など山岳地域独特の天然資源を得るため、奥山に踏み入った。北アルプス後立山連峰周辺を生活圏とする山人たちも、峠や尾根を越え、高瀬や黒部の谷を渡り、カモシカやクマを捕ったり、イワナを釣ったりして生活の糧としていた。

余談になるが、山人を「やまひと」と読むと前述とは違う意味合いを持つようになる。日本民俗

学の巨人で、日本山岳会の早期会員でもあった柳田国男は自著『山の人生』[註11]で山人について記している。それによると、山人とは山男・山姥・天狗・大人などと呼ばれる山中に暮らす異形の者の総称をいうという。さらに、日本列島の先住民の姿をそれらに想定している。

閑話休題。百瀬慎太郎は「案内人風景」[註12]の中で「それらの案内人たちは、誠に愛すべき純朴な山人であった」と述べている。「それらの案内人たちは」とは猟師やイワナ釣りや杣人のほか、陸地測量部の測量登山に同行した者たちであると、具体的な人物として上條嘉門次、遠山品右衛門、小林喜作、横沢類蔵、大西又吉の名を挙げている。実際に山案内を積極的に行ったかどうかということに個人差は見られるが、彼らは猟などで尾根や谷を跋渉していたことで山岳の地形・地理に通じ、なおかつ山中での生活にも長けていたために、登山客を案内する能力が備わっていたであろうことは想像に難くない。

大町登山案内者組合設立時の山案内人たちの中核はすでに明治末の測量登山に同行した経歴を持つ若干名から構成され、そのほかは彼らに連れられて猟などを手伝ったり測量登山で荷を背負ったりして山を知った者たちがほとんどであったと考えられる。設立時からの山案内人である黒岩直吉と松沢由蔵は中核のひとりであった伊藤菊十に誘われて組合に参加したといひ[註1]、戦後活躍した山案内人の桜井一雄は大西又吉が山の師匠であったという[註13]。このように古参の山案内人たちの中には、山人と呼ばれる人々と山を共に歩くことで山を覚えた場合があると思われる。

では一体、山人自身はどのようにして山を覚えただろうか。そこには名もない山人たちによって綿々と蓄積された山での経験・知識や工夫が受け継がれていたのだろうと推察する。そして、近代登山と山人たちが遭遇した時代に居合わせたの

が、嘉門次や品右衛門や喜作といった今に名を残す山人たちであったのではないだろうか。彼らは確かに超人的な逸話を残してほかの猟師たちとは一線を画し、自らの力で山に生活の場を切り開いたという面も大いにあると察するが、おそらくその根底には、島々(現安曇村)や大出(現大町市平)や牧(現穂高町)といった北アルプス山麓の出身地に継承された「山岳文化」とも呼べる、杣や猟などに関する「山の知恵」を先人から受け継いでいたと考ええる。

しかし、山人と呼ばれた人々が自ら文字で記録を残すことはほとんどなく、それに関する直接的な資料は現在のところ十分に確認できていない。それゆえ、ここに述べた山人の姿についてはあくまで推測の域を出ていない。山案内から少し離れた話題になってしまったが、山人と日本の近代的な山との関係については今後別の場で考えてみたい。(つづく)

(大町山岳博物館学芸員)

[註1] 荒井今朝一著「大町登山案内人抄録(山と博物館)第19巻11号・第20巻1号・同3号(一九七四、七五)」「註2」大町案内人組合創立80周年記念誌「岳」とともに先達(大町山案内人組合)一九九九
[註3] 企画展解説書「対山館と百瀬慎太郎 岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る(大町山岳博物館、二〇〇二)の筆者執筆部分より抜粋し、一部訂正・加筆した。
[註4] 田部重治(一八八四〜一九九二)英文学者。富山県出身。東京帝国大学英文科卒。
[註5] 田部重治著「わが山旅五十年」桃源社、一九六四
[註6] 武田久吉(一八八三〜一九七二)東京出身。英国公使E・M・サトウを父に持つ。東京外国語学校卒。植物学者。理学博士。
[註7] 武田久吉著「明治の山旅」創文社、一九七二
[註8] 「大町市史」第4巻近代・現代(第2章3節)「大町市、一九八五」
[註9] 長谷川如是閑著「ガタ馬車當時の大町(大町案内)」テラス郷土社、一九二七
[註10] 小暮理太郎著「山の懐い出」龍星閣、一九四一
[註11] 柳田国男著「山の人生」郷土研究社、一九二六
[註12] 百瀬慎太郎著「案内人風景」文藝春秋(一九三二)「近藤信行編」山の旅 大町、昭和篇(岩波書店、二〇〇三)収録
[註13] 瓜生卓造著「おまち物語(山と溪谷、一九七六)

歌に読む百瀬慎太郎の心情(後)

峯村 隆

その後
なりはひを廃めて侘居の静けさに
籠りて何か足らぬ寂しき

移り住むこの小さき家に燕の
来り巣くはず何か淋しき

思ふ事なした一人あて山小屋の
爐辺の榾火見つ、あかなく

まなかひに初雪の山を仰ぎ見つ
思はず歩み止めつ、居り

(昭和十九年、五十一歳)

昭和十九年 □雪の立山・針ノ木峠を大正
十二年に共に越えた盟友・伊藤孝一が三月に
松本へ疎開。九月、伊藤と戸隠参詣。□十月、
山の画家で最も親しかったであろう茨木猪之
吉が穂高山中で行方不明となる。

朝開き夕べに萎む露草の
紫の花見つ、さびしき

書を読めど友を思へど戦ひの
事にいたれば静心なし

秋海棠咲くべくなりぬ底知らぬ
寂しさに聴く秋雨の音 (敗戦)

昭和二十年 □三月、次女結婚。□八月、
敗戦。□十月、横有恒の軽井沢から常盤山崎
への疎開を介助。

雪晴れの今朝のまぶしき陽の光
ひと、きのまのうらさやけさや

河風に袂はらませ板橋の
長きを渡るわが下駄の音

(昭和二十年、五十二歳)

昭和二十一年 □一月、石川欣一の帰国を

喜ぶ。□二月、熊井文吾の戦死を聞き大いに
悲しむ。□七月、大町観光協会設立、専従。
□十月、三女結婚。□十一月、長女結婚。
今日見れば六年よれる長の椅子
ありしままにて寂しく残るも

聞におどる技拙ければ明るみに
生くる術なき今日の代なるか

いつく〜と待ちてありしをとことほに
帰らぬ霊と聞かかなしき²

業を廃めて三年の秋は来ぬ
なお無為にして続く一生か¹

(昭和二十一年、五十三歳)

昭和二十二年 □六月、日本山岳会信濃支
部設立のため、横有恒と松本へ行く。□九月、
榎と鹿島槍に登る。□十一月、横塚京・四女
婚約・初孫誕生。

戦ひに敗れしことは言はざらむ
この山々のおほき鎮もり

嶺に立ちて見さくる四囲の山々に
我が過ぎし日の足跡を思ふ³

君去ると聞けば高瀬の板橋を
わがふむのちの寂しさを思ふ⁴

(昭和二十二年、五十四歳)

昭和二十三年 □四月、日本アルプス山小
屋組合副会長に。□七月、大沢小屋再開。□
八月、大破した針ノ木小屋を解体、再建の緒
につく。このころより食物嚥下障害あり。
大沢の小屋の窓辺ゆ爺ヶ嶺の

秋ばむ色を見つつ幾日ぞ
いちじるく輝きて見ゆ雲きれの

あひより光る鹿島槍ヶ峰

(昭和二十三年、五十五歳)

戦後、慎太郎は大町の観光や、登山関連で
社会的な働きもした。娘の結婚・孫の誕生、
山小屋の再開・再建へと生きる力の湧く出来
事も少なくはなかった。昭和二十一年以降は
活発に筆を走らせ、地元紙などへ「山岳夜話」
や「針ノ木峠雑談」を綴りつづけている。

だが戦争にまつわる痛手は大きく、歌を読
む限り慎太郎の心の奥底に沈殿する悲しみや
寂しさはつるのぼかりのように見える。疎開
中の横有恒との「ひと、きのまのうらさやけ
さ」は、大きな慰めだったろう。

昭和二十四(一九四九)年三月五日、食道
癌にて逝去。享年五十六歳三カ月。

おわりに

慎太郎は戦後、「物質に敗れたものは心に
生きるより外はないからである。その心の奇
り所は山への思慕であり、山への憧憬を有つ
人々への懐かしさである」⁵とも、「山を想へ
ば人恋し、人を想へば山恋し。童謡ならぬ老
謡を口吟みながら、我ながらいつまでも抜け
きらない老センチメンタリストを自分に発見
するのである」⁶とも述べている。

山を想へば人恋し 人を想へば山恋し
こうして短歌を読み進んでみると、この言
葉は慎太郎の生きざまを凝縮しつくした表現
であることをしみじみと感じる。

山が崇高、神聖、永遠、無限、不動の存在
とすれば、人は刹那、有限で、俗界に移ろ
う存在。百瀬慎太郎は山を徹する素質を持ちな
がら、この両域を等しく行きつ戻りつする生
涯を歩んだと考える。

永遠に終わりのない言葉。
人が人を超えられない限り、山を愛する
人々に永く語り継がれる言葉であろう。

最後に、金田国武の詩を記して筆をおく。
鳩の手紙(抜粋)
わしも昭和二十四年にせわしい現世と別れ
早や五十ねんが経ってしまったが
未だ人恋しさの煩悩を捨てきれず
今も岳のまわりをさま迷っているのだよ
あれから山気違い連中が大勢やってきたなあ
横有恒先生や石川欣一先生
平林武夫君や山の会の仲間たち
短歌仲間の榎木次郎君たちもやってきたな
山を看に飲み明し
昔んなこの雪深を登りつめ
運筆岳の大きな山ふところへ包まれていったよ
貴方は夜の白むまで師父と語り明し
翌朝スキーを担いで黙々雪深を登っていったが
一足ごとに足跡も手も消され
風を切つて大雪深を滑走することはできなかった
岳のロマンに憧れさせた少年の日
信濃大町駅前の中郡山岳協会の上空で輪を描いていた
あの雪のように白い伝書鳩に
駒草一輪をえたる手紙を託すと
貴方はパッパの荘厳な葬送曲に包まれていったのだ

1 横有恒の疎開にかかわる四首のうち二首。この板橋は高瀬川にかかる観音橋をさす。
2 熊井文吾の戦死にかかわる六首のうち一首。
3 以上は横と鹿島槍登高の歌十八首のうち二首。
4 横の帰京に際しての歌。
5 百瀬慎太郎「山岳夜話」(一九四七)。
6 百瀬慎太郎「針ノ木峠雑談」(一九四八)。
7 「雲の湧く峰 霧流れる谷 丸山彰追悼集」(二〇〇〇)所収。

本稿をまとめるにあたり短歌の校閲など、遠藤三春氏にお世話になりました。記してお礼申し上げます。(大町山岳博物館学芸員)

訂正とお詫び
第四九巻二号四段目、四百目の歌の「たきり」は「たきち」の誤りでした。

山と博物館 第49巻第3号
二〇〇四年三月二十五日発行

発行 長野県大町市大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六-二二二-〇一〇一
FAX 〇二六-二二二-〇一〇二
E-mail: sanpaku@city.oomachi.nagano.jp
URL: http://www.zaiyuan.chugangan.jp/sanpaku/

印刷 森奥村印刷
定価 年額 一、五〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七三三九三